

ハインリヒ・ゾイゼの『範典』写本における
永遠の知恵

細 田 あ や 子

2013年3月

比較宗教思想研究 第13輯
死生観・靈魂観から見た比較研究

新潟大学大学院現代社会文化研究科
比較宗教思想研究プロジェクト

ハインリヒ・ゾイゼの『範典』写本における 永遠の知恵

細 田 あ や 子

1. 永遠の知恵としもべ
2. 『範典』の写本挿絵
3. 永遠の知恵の図像
 - 3.1. 『範典』の導入の挿絵（挿図1）
 - 3.2. ヴィジョンの挿絵
 - 3.2.1. ヴィジョンの図像学
 - 3.2.2. ゾイゼがみたヴィジョン（挿図2, 6, 8）
 - 3.2.3. ゾイゼ以外の人物がみたヴィジョン（挿図9）

ハインリヒ・ゾイゼ（1295頃～1366年）は、13歳のときにコンスタンツのドミニコ会の修道院に入って以来、修道士として神学を学び、さらにストラスブルクやケルンで研鑽を積んだ。ケルンの高等神学院（studium generale Coloniensis）ではマイスター・エックハルト（1260頃～1328年頃）の薫陶を受ける。ケルンで学問を修めるとコンスタンツに戻り、読師として修道士や修道女たちの教育に従事した。しかし、異端の嫌疑をかけられた師エックハルトを『真理の書』（1328～29/30年頃）において擁護したこともあり、読師の任を解かれる。修道院内で霊的生活を送った後、司祭として各地で説教をしたり、信仰生活を行なう人びとに対して司牧の任にあたった。のちに修道院長に任命されたが、根拠のない中傷を受け、世間や友人からも関係を断たれてしまう。だが管区長と総長から身の潔白が保証され、晩年はウルムで暮らしそこで亡くなった。

ゾイゼは霊的生活にある者を導くために教化的な書物を著したが、晩年になってそれまでの自分の著作四書（『自伝』『永遠の知恵の書』『真理の書』『小書簡集』）をまとめ、『範典』（Exemplar）として出版した（1362～63年）。ゾイゼの著作は当時広く読まれていたが、それらが多くの人びとによって書き写されていくうちに内容が改変、歪曲されるおそれがあった。そのため、彼は自著を編集して『範典』として出し、それを正統な決定版としたのである。

ハインリヒ・ゾイゼの信仰生活において、「永遠の知恵」はきわめて大きな位置を占める。本稿では、ゾイゼがこの永遠の知恵をどのようにとらえていたのかということ踏まえたうえで、『範典』の写本挿絵におけるその図像を検討する。ヴィジョンの図像をいかに解釈するかという観点も顧慮してゆく。

1. 永遠の知恵としもべ

永遠の知恵とは、旧約聖書のなかの知恵文学といわれる諸書で言及される知恵、霊が擬人化されたものである。知恵 (sophia, sapientia) は、文法的にみてその名詞の性から、女性的存在として擬人化されてきた。知恵文学のなかのひとつ「知恵の書」は、知者といわれたソロモン王の著作ともみなされ「ソロモンの知恵」ともよばれる。そこには、たとえば「知恵は人間を慈しむ霊である。しかし、神を汚す者を赦さない。神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、人の言葉をすべて聞いておられる。主の霊は全地に満ち、すべてをつかさどり、あらゆる言葉を知っておられる」(1:6-7) とある。

『範典』の第一書の『自伝』は、人が信仰を深めてゆく過程を修道士の言動をとおして段階をおって述べたものだが、その第3章には、「いかにして彼は永遠の知恵と霊的結婚へいたったのか」というタイトルのもと、ゾイゼが永遠の知恵に魅了され、それをとても強く愛し求めていた様子が描写されている。あるとき修道院で「知恵の諸書」の言葉が朗読されると、ゾイゼは非常に心を動かされ、永遠の知恵は私の愛する人にならなければならない、私は彼女のしもべになろう、と決心する(第3章, DS 14,3-4)¹。永遠の知恵をゾイゼは至上の愛の

¹ ゾイゼの著作からの引用は、Bihlmeyer 1907: *Heinrich Seuse, Deutsche Schriften* = DS による。ゾイゼ1991神谷訳17。

源と呼び、永遠の知恵と愛に満ちて合一しつねに神が現前することを熱心に求めていたが、この愛する人に対する思慕の念が強くなるにつれて、言葉では表現できないような仕方で、すべての善の源泉が彼の魂のなかへ流れ込むといった神秘体験をする。幾度となくこの愛する人が、愛に満ちた胸に抱きしめられたかということも言い表せない。賛美の歌が歌われ、弦楽器が響いたり、この世の愛について歌われるのを聞くと、ゾイゼの心と思いは離脱して最愛の人のなかへと引き込まれるようになった(第3章, DS 11,20-15,24)²。

このような脱我状態やヴィジョンをゾイゼは体験し、のちに自分の胸のなかに永遠の知恵と自分の魂とを抱擁するのを見る(『自伝』第5章, 挿図2〔後述〕。さらに第50章にも同様の記述がある)。『自伝』には、過酷で痛々しい修行、死に瀕するまでの苦行の状況とあわせ、神との神秘的合一・一致 (unio mystica) へ到達しようとする希求、一致へ至るまでの過程、さらに神の啓示などが生き生きと、また詩情豊かに描かれている。

『範典』の第二書『永遠の知恵の書』は、永遠の知恵としもべゾイゼとの問答形式で構成され、イエスの受難に思いをはせ、霊的、内的な生活を送るための教えが書かれている³。この書の第1部第1章は、「私は若いころから知恵を愛し、探し求めてきた。そして知恵を私の花嫁にしようと願っていた」(Hanc amavi et exquisivi a iuventute mea, et quaesivi mihi sponsam assumere. DS 200,14-15) という「知恵の書」8:2からの引用で始まっている⁴。これをドイツ語で言い換えたものが続くが、この句はまさにゾイゼ自身の発した言葉とも解せるだろう。永遠の知恵としもべとの対話形式により、神や霊的生活について教え導くこの書は、ドイツでもっとも読まれた霊的書物、模範的信心書といわれる。

永遠の知恵は、とりわけ『永遠の知恵の書』、『自伝』、そして『知恵の時祷書』において明確になっているように、ゾイゼの愛の対象である。貴婦人に対する騎士の愛 (Minne) としても理解され、最愛の人として彼女に最高の賛辞

² ゾイゼ1991神谷訳15-19。

³ 『範典』プロローグ (DS 3,19-4,8)。

⁴ 『知恵の時祷書』I, 1; Fenten 2007, 9。

⁵ 『知恵の時祷書』(Horologium sapientiae) は、『永遠の知恵の書』に加筆してラテン語に翻訳したもので(1331～34年)、ヨーロッパ全体に広く流布した。Fenten 2007, xiii-xxii。

を捧げている。永遠の知恵との魂の交感が、ゾイゼの霊的生活の土台となっているが、永遠の知恵の愛を得るために彼は霊的騎士となってさまざまな修練も行った。

ゾイゼの前にあらわれた永遠の知恵は、高く、雲の玉座に座って漂い、明けの明星のようにまたたき、きらめく太陽のように輝く。彼女の王冠は永遠で、衣装は至福、言葉は甘美で、彼女の抱擁はあらゆる欲求を静めた。彼女は遠くかつ近く、高くかつ低く、目の前のここにいるかと思えば隠れて見えなくなった。彼女は自分と交わるのは許容するが、だれも彼女をつかまえることはできなかった。彼女は天のもっとも高いところよりも聳え、深淵のもっとも深いところにも触れていた。彼女は地の果てから果てまで力強くひろがり、すべてを慈しみをもって治める。永遠の知恵は、ゾイゼには美しい処女のように見えたり、気高い若者、賢い女主人のようだったり、美しい恋人のように感じられた（『自伝』第3章、DS 14,10-21）⁶。

このようにしもべが愛を捧げる恋人、最愛の人は、近くて遠い場所におり、とらえがたく、女性か男性かもはっきりしない。神と神性、真なるものと真理とが織りあわされてできあがる永遠の合一を、ゾイゼは脱我状態において目にし、神と語らうが、そこでは、神は永遠の真理とも呼びかけられている。この永遠の真理はさらに、力に満ちた神、信頼すべき天の父でもあり、また、わが母マリア、憐れみ深きキリストでもあり、ゾイゼの愛する永遠の知恵でもあろう（第30章、DS 88,10-89,28）。永遠の知恵が、永遠の真理、神の真理への正しい道へと導くのである。また、聖母の子が永遠の知恵とされ、イエスだけが心から愛を捧げる優しい人である、ともいわれている（第41章、DS 140,7-12）。

さまざまな姿を見せつつも地上には属さず、この世を越えた超越者としてあらわれる永遠の知恵は、実際に写本挿絵ではどのように描写されているだろうか。

⁶ ゾイゼ1991神谷訳17-18。

2. 『範典』の写本挿絵

ゾイゼの著作写本のうち、『範典』がおさめられているものは15点ほど存在する（13点の写本と、2点の印刷本）⁷。そのなかで6点の写本および2点の印刷本に挿絵がほどこされている⁸。挿絵を伴った現存する最古の写本は、ストラスブール国立大学図書館所蔵の写本（Ms. 2929）である⁹。これはおそらく、現在は残っていない『範典』の原本の写しでオリジナルに近く、挿絵もゾイゼ自身の構想によるものを反映していると推測されている。挿絵の様式などから、1370年頃ゾイゼの死後まもなく、ストラスブールで制作されたものと考えられる¹⁰。このストラスブール写本に入っている11点の挿絵が、今日ゾイゼ関係の図像研究において基準となっている¹¹。本稿でもこの写本の11点の挿絵を中心に、ゾイゼの著作テキストと画像の関連について考察する（11点の挿絵には挿図番号をつけ、本稿末尾に載せる）。

次ページの表は、ストラスブールの『範典』写本の11点の挿絵を内容によって分類し（A, B, C）、さらにBのヴィジョンの図像を幻視者の別によって分けたものである。

⁷ Altrock/ Ziegeler 2001, 164

⁸ Diethelm 1988, 166-168; Altrock/ Ziegeler 2001, 164.

⁹ Bihlmeyer 1907 によると写本 A。

¹⁰ Diethelm 1988, 166; Exh. Cat., *Krone und Schleier*, 477-478.

¹¹ Bihlmeyer 1907以来、12点とする見方が多いが、最近では、上下の区画に分かれているfol. 67rの挿図（Bihlmeyerの数え方だとBild 8, Bild 9）をひとつの図とみなして11点と数える立場もあるので（Colledge/ Marler 1984, Lentjes 2004, Ganz 2008など）本稿でもそれに従う。

表 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929）の挿絵

内容	挿 図	関連するテキスト
A 『範典』の導入の挿絵	挿図1 (fol. 1v) 永遠の知恵としもべとの霊的結婚。	
B ヴィジョンの挿絵	(a)ゾイゼのヴィジョン 挿図2 (fol. 8v) 幻視者ゾイゼとヴィジョンの中のゾイゼ（ゾイゼ2度登場）	『自伝』第5章
	幻視者ゾイゼが描出される 挿図3 (fol. 22r) 挿図6 (fol. 62r) 挿図7 (fol. 65v) 挿図8 (fol. 67r) ヴィジョンの中のゾイゼ。 幻視者が幻視の中に入っている。	『自伝』第18章 『自伝』第41章 『自伝』第43章 8 (上) 『自伝』第36章 8 (下) 『自伝』第20章, 44章
	挿図5 (fol. 57r) 苦しみを受けるゾイゼ, ヴィジョンの中のゾイゼ。 ヴィジョンの内容のみ, とも考えられるが, 幻視者自身がヴィジョンのなかにも考えられる。 der diener でなく Job とある。	『自伝』第20章
(b)ゾイゼ以外の人物のヴィジョン	挿図4 (fol. 28v) 幻視者アンナ+幻視の内容 (挿図4の上の部分は, ゾイゼのヴィジョンでもある) 挿図9 (fol. 68v) 幻視者: 生まれの高貴なある女性, 信仰深い女性	『自伝』第22章 『自伝』第37章, 45章
(c)ゾイゼとゾイゼ以外の人物のヴィジョン	挿図11 (fol. 109v) (上) アンナのヴィジョン, 幻視者アンナ不在 (下) ゾイゼのヴィジョン	11 (上) 『自伝』第34章, 20章 11 (下) 『永遠の知恵の書』プロローグ, 第13章
C ゾイゼの思想の挿絵	挿図10 (fol. 82r) 神秘の道程について	『自伝』第53章

3. 永遠の知恵の図像

3.1. 『範典』の導入の挿絵（挿図1）

『範典』の最初の挿図1 (fol. 1v) には, ゾイゼと永遠の知恵との関係が象徴的に提示され, ゾイゼの著作の導入としてふさわしいかたちになっている。挿絵ページは黄土色の線と赤い装飾文様で枠組みがなされ, 挿絵部分が枠で囲まれるようになっている（左側には枠の線はない）。

画面の左右の端に二人の人物が立ち, 枠内の画面の四隅には上半身姿の人物が配置され, それぞれテキストが書かれた巻物を広げている。彼らは互いに会話をしているように見える。人物のわきには名前が記されており, それによると, 左側に立つのが永遠の知恵のしもべ (Der diener der ewigen wisheit), 右側に立つのが永遠の知恵 (die ewige wisheit), 四隅のうち, 左上がダヴィデ (Dauid), 右上がソロモン (Salomon), 左下がヨブ (Job), 右下がアリストテレス (Aristotiles) となっている。

画面の上の端, 線で装飾された枠の外に
「この挿絵は永遠の知恵と魂との霊的結婚を示す。」
(Disú bild bewisent der ewigen wisheit mit der sele geischlich gemahelschaft.)
というテキストが書かれている¹²。

向かい合って立つ二人の人物のうち, 左側の永遠の知恵のしもべ, すなわちゾイゼは, 剃髪で, 白い長衣の上に黒のマントをはおり, 修道士の姿である。衣の胸元がはだけて, イエスの名 IHC (= IHS) の文字が見える¹³。彼は神への愛を証明するため, 自らの身体に鉄筆でイエスの名 IHS を刻み込み, それを愛のしるしとみなしていた (『自伝』第4章, DS 15,26-16,35)。後述するが, ヴィジョンのなかにもゾイゼの図像に特徴的な薔薇の花の冠や, 両手両足に見られる薔薇の花による聖痕のしるしはない。

しもべが持つ巻物には

¹² ストラスブール写本の挿図のなかの文章, キャプションについては, おもに Colledge/Marler 1984; Diethelm 1988, 172-223参照。

¹³ ストラスブール写本の挿図上では, IHS ではなく IHC である。Lentes 2004, 43, 72 注112も参照。

「これを私は愛し、私の若き日から探し求め、私は彼女を花嫁として選んだ。」
(Diz han ich geminnet vnd vs gesüchet von minen iungen tagen vnd han mir sie vs erkorn ze einer gemahel.)

と書かれている。これは「知恵の書」8:2のドイツ語訳で、これ=彼女とは、知恵のことである。すでに触れたとおり、この句は「永遠の知恵の書」第1部第1章のはじめに引用されている (DS 200, 18-19)。巻物の上には、

Hanc amavi (et cetera) とあるが、これは「知恵の書」8:2の最初の単語である。

画面の右側に立つのが永遠の知恵である。冠を頭につけ、左手で太陽と月と星空を示す円盤を持つが、これは宇宙をあらわし、永遠の知恵が全世界の創造主、支配者であることを象徴する¹⁴。右手に持つ巻物には

「わが子よ、あなたが神の知恵をのぞみ求めるなら、正義の徳を身につけよ。」

(Kind mins, begerst du der gêtlichen wisheit, so behalt die tugent der gerechtikeit)

とある。これは「シラ書」(教会の書) 1:33に関連する¹⁵。その上に
fili, concupiscis sapienciam et cetera と書かれてあるが、これは、巻物に書かれたドイツ語のもとと考えられる「シラ書」1:33の前半である。

ページの四隅の人物のうち、右上のダヴィデは、王冠をかぶり、雲の中から現れ出たような感じで、巻物をひろげ、そのテキストを指し示すように人差し指を巻物に向けている。彼が手にする巻物には、

「神の知恵の始まりは、畏れをもって思慮深く神に熱心に仕えるべきである。」

(Ein anvang der gêtlichen wisheit ist got flisschlich dienen in vorchtlichee behûtkeit.)

と書かれてある。ダヴィデの王冠のわきに

「主を畏れることは知恵のはじめ」

(Inicium sapiencie timor domini.) (「詩編」111:10; 「シラ書」1:14)¹⁶

とあり、巻物のドイツ語が示唆する聖書句の内容である。

左上は王冠をかぶった老人姿のソロモンである。巻物には、

「太陽の像はそのように美しくはない。それ(知恵)は星の輝きを越える。」

¹⁴ Colledge/ Marler 1984, 306.

¹⁵ Colledge/ Marler 1984, 306.

¹⁶ 「主を畏れることは知恵のはじめ」(詩編111:10; シラ書1:14) という句は、「永遠の知恵の書」第21章にも記されている (DS 287,6-7)。

(Der sunnen bild ist nit so fin, siu übertriffet der sternen schin.)

と書かれている。このテキストは、「知恵の書」7:29に関連し「それ」とは知恵のことで¹⁷、知恵は太陽や星よりも輝くということ述べている。

左下には、三角にとがった帽子をかぶるヨブがいる。ヨブが持つ巻物には、「自分の身体を甘やかして保持しようとする人は、永遠の知恵の愛を得ることは決してできない。永遠の知恵を愛する人として得ようとのぞむ人は、世俗の愛を放棄しなくてはならない。」

(Wer sines libes mit zartheit wil pflegen, der endarf sich der ewigen wisheit minn niemer angenehmen. Der welt minne müss er lan, der die Ewigen wisheit ze einem lieb wil han.)

巻物の上には

「知恵は、命あるものの地には見いだされない。」

(Sapiencia non inuenitur in terra suauiter uiuentium.)

という「ヨブ記」28:12-13に関連する句が書かれ、巻物のドイツ語の文章と密接に関連する句が引用されている。

右下はアリストテレスで、ヨブと同様の帽子をかぶっている。彼が手にする巻物には

「この知恵を保持しよう(この知恵に仕えよう)とする者は、彼の生活すべてを秩序立てるべきである。」

(Wer diser wisheit wil pflegen, der sol ordnen alles sin leben.)

その巻物の上に

「賢者・知者は秩序づけるべきである(命令すべきである)。」

(Sapientis est ordinare.)

とあるが、この句は、「形而上学」I c. 2 (982 a 18) に基づくものとされ、トマス・アクィナスによって引用されているといわれている¹⁸。

四隅の人物、ダヴィデ、ソロモン、ヨブ、アリストテレスは、「自伝」のなか

¹⁷ Colledge/ Marler 1984, 305. 「知恵は太陽よりも美しく、すべての星座にまさり、光よりもはるかに輝かしい」(「知恵の書」7:29 (新共同訳))。

¹⁸ Colledge/ Marler 1984, 305. 『知恵の時祷書』II, 6にも引用されている。Fenten 2007, 209.

でそれぞれ重視されている。伝統的に詩編の作者とみなされているダヴィデが、「主を畏れることは知恵のはじめ」（「詩編」111:10; 「シラ書」1:14）と述べ、知恵とは主を畏れることでもあると強調されている。「知恵の書」からの句を想起させるテキストを持つソロモンは、知者、賢者としての伝統的なイメージで登場している。「自伝」でも賢者ソロモンの言葉として知恵の諸書の章句が挙げられている（第3章など）。ヨブについては、苦悩の人（第20章）、あわれなヨブ（第24章）、善良なヨブ（第51章）、とよばれているが、神の試練に耐えた義人ヨブが信仰者の模範とみなされている。とくに、苦難や試練にあうゾイゼは、自分自身をヨブと重ね合わせてみている（挿図5にも、苦難にあうゾイゼにヨブという文字が書かれている）¹⁹。

他方、アリストテレスについては「自伝」第50章で言及されている。霊の娘エルスベト・シュターゲルが神について質問したのに対し、ゾイゼはアリストテレスを引き合いに出して答えている。徳のある異教の教師、理性あるアリストテレスは、自然の運行を探求しながら、自然の支配者、あらゆる被造物の支配者である主を追求した。その主を自分たちは神と呼ぶ、とゾイゼは語っている（DS 171.6-16）²⁰。

この挿絵ページは、永遠の知恵のしもべ（ゾイゼ）と永遠の知恵とが向かい合っており、二人が『範典』の中心であることを示している。それは、巻物に書かれた二人の言葉のやりとり、およびページの上端に記された「この挿絵は永遠の知恵と魂との霊的結婚を示す」という語句からも明白である。『範典』に通底する理想的な永遠の知恵とそのしもべの関係——霊的結婚——を明確に提示している。と同時に次の挿図2にも直結する。

¹⁹ この挿図5だけ、ゾイゼに対して（永遠の知恵の）しもべ（der diener (der ewigen Weisheit)）という文字ではなく、ヨブ（Job）と書かれている。

²⁰ ゾイゼ1991神谷訳205-206。

3.2. ヴィジョンの挿絵

3.2.1. ヴィジョンの図像学

先の表からもわかるように、『範典』写本の挿絵のなかにはヴィジョンを描出したものが多い。筆者はこれまで中世のヴィジョンや夢の図像を考察しており、「幻視と夢の図像学」という観点で論じたことがある。その際、どのような内容がどのように描かれているのかに注目し、①幻視者のみが描出されているもの、②幻視者と幻視の内容があわせて描出されているもの、③幻視の内容のみが描出されているもの、という3通りのタイプに分けて検討した²¹。

だがストラスブル国立大学図書館の『範典』写本（Ms. 2929）のヴィジョンの挿絵についてみると、この分類では描かれた内容を適切に考察することが難しいと気づいた。というのも、ゾイゼがみたヴィジョンが図像化された場合、幻視者ゾイゼと幻視の内容とが一体化され、明確に区別することができないからである。幻視者であるゾイゼが、自分がみた幻視のなかに入っており、それが彼の幻視の内容でもあるのである。たとえば聖母子がゾイゼのもとにあらわれたというヴィジョンが視覚化された場合、聖母子像が幻視の内容となり、ゾイゼが幻視者なので、先の分類では②のタイプとなる。だが、挿図3にあるように、ヴィジョンのなかで聖母子から壺を受け取るゾイゼをみると、そこでヴィジョンの内容と幻視者とを分けることにあまり意味はない。さらに、ヴィジョンのなかにゾイゼがいる画像でも、それが別の人物によってみられたヴィジョンの場合がある。描かれている場面は類似していても、それをみた幻視者が異なる場合があるのである（挿図7と挿図11の上の場面を比較）。つまり、ゾイゼ写本のヴィジョンの図像は、上述の分類の②と③のタイプとして、はっきり類別することができない。

もっとも、このヴィジョンの図像学的分類も、画像を分析する際のある程度の目安である。ヴィジョンや夢という人間の内面の状況や現実世界とは別の異界を描いた画像において、この分類にあてはまらないものがあるのも理解されよう。したがって多種多様な図像を細かく分けるよりも、おのおのの画像からよりコンテクストに即した意味を見いだすほうに視点を切り替えてみよう。別

²¹ 細田2012, 214-231. さらに細田2011a, 270-276も参照。

の観点に立つとより柔軟に画像に向き合う可能性が開かれてくる。

そこで以下では、『範典』の著者ゾイゼがみたヴィジョンのなかに永遠の知恵があらわれた図像を中心に考察してゆく。ゾイゼのヴィジョンにおいては、ゾイゼが神や永遠の知恵、聖母マリア、天使たちにどのように語りかけられ、どのようにコミュニケーションしているのかという観点が、内容を把握するうえで鍵となる。没我状態になったゾイゼが、超越者、超自然的存在者とのようにコンタクトをとっているかということが、テキストからも強調されている。『範典』写本の挿絵は、描かれたヒエロファニー（聖なるものの顕現）といえるので、ヒエロファニーの図像学という視点を顧慮しよう。この点については、ゾイゼ以外の人物のヴィジョンの図像も論じる。

3.2.2. ゾイゼがみたヴィジョン（挿図2, 6, 8）

ゾイゼは、信仰生活の最初の頃から、悩みを抱いていると没我状態に引き入れられ、天国、永遠の世界をみて、静かで安らかな気分となったという体験をしている（『自伝』第2章, DS 10,10-11,18）。また、厳しい苦行を16年間も自分に課して身体がひどく傷ついたとき、天の使者があらわれて神の言葉がもたらされたり（『自伝』第15章, DS 40,26-30）、苦しさに耐えられなくなり神にむかって嘆きの声をあげると、彼の内部で魂が語りかけるのを聞いたりする（『自伝』第18章, DS 48,11-49,2）。修道院の僧房（cell）や礼拝室（kapell）で祈りや観想にふけていると、ある光景を目にしたたり啓示を受けたりしたというヴィジョンの体験も多く記されている。ゾイゼが受け取るヴィジョンは、祈りや願いに対する神からの応答である。

ゾイゼがみたヴィジョンの図像を取り上げるが、挿図2（fol. 8v）は、ゾイゼに関する画像のなかでもっともよく知られているものの一点であろう。

画面中央に台座に腰かけ正面を向くゾイゼがいる。剃髪のゾイゼの頭上に、永遠の知恵のしもべ（der diener der ewigen Wisheit）という文字が書かれている。ゾイゼは両手で修道服の胸元を開いている。ゾイゼのふとこで、永遠の知恵とゾイゼの魂が互いに抱擁しあう。左側の永遠の知恵は赤いマントをはおり、頭の後ろには赤い線の十字が入ったニンブスが認められる。永遠の知恵のほうゾイゼの魂より大きく、腕を伸ばしてゾイゼの魂を引き寄せようとする。

る。ゾイゼの魂のほうは裸で、その胸元に IHC (= IHS) の文字が見える。

ゾイゼの両脇の背後にそれぞれ天使が立つ。二人はゾイゼのほうを指さし、この挿絵を見る者が中央のゾイゼに視線を向けるよう誘導しているようだ。修道服のゾイゼ自身、両手で自分の胸元を正面に向けて開示するしぐさで、永遠の知恵と自らの魂の愛のこもった親密な関係を、受け手である挿絵の観者に明確に示そうとしている。

この挿絵の前ページには、
「次の絵は、よき始まりをなした人間は神の慰めを見いだすということを示す。」
(Diz nagend bilde bewiset eins wolanuahenden menschen raizzlich gesüche nach gëtlichem troste.)

そして挿絵ページの上には、
「彼は私を、そして私は彼を、愛をこめてやさしく抱擁する。そうして私はあらゆる被造物から自由で、それらから束縛されていない。」
(Er hat mich vnd ich in minneklich vmbuangen, dez stan ich aller creaturen ledig vnd bin mit in vnbehangen.)
と書かれている。

この挿図2は、『自伝』第5章にあるヴィジョンに基づく。それによるとしもべゾイゼは、苦悩に見舞われたころのある早朝、ヴィジョンのなかで自分が天使たちに囲まれているのをみた。彼はその光り輝く天の領主（himelfürsten）²²の一人に、神の隠された住まいは彼の魂のなかでどのようなものなのかと尋ねた。すると天使は、「喜びをもってあなたの内面に目をやり、慈愛に満ちた神が愛を捧げるあなたの魂と愛の喜びを行っている様子を見なさい」と答えた。ゾイゼはすぐに自らに目を向けると、彼の胸の上では肉体が水晶のように透明だった。胸のあたりには、永遠の知恵が愛らしい姿で穏やかに座っていて、そしてそのかたわらにしもべの魂が、天をあこがれつつ座っているのを目にした。しもべの魂は神の側のほうへ愛らしく身を寄せ、彼の腕に抱かれ、神の胸に抱きしめられ、そのため意識を失い、愛に酔って、愛する神の腕に身をまかせていた（『自伝』第5章, DS 20,10-23）²³。

²² 権天使か天使の上位の者と考えられる。

²³ ゾイゼ1991神谷訳24-25。

永遠の知恵に対するゾイゼの熱い思いについては、すでに述べたとおり『自伝』第3章でも記されており、しもべとしてゾイゼが永遠の知恵にすべてを捧げようとしたことがうかがえる。

この挿絵で特徴的なのは、ゾイゼが二重に描出されていることである。ヴィジョンを受け自分の胸で起こった様子を見る幻視者として、およびヴィジョンのなかにあらわれたしもべの魂として、ゾイゼの姿が重複している。その重複性は、一人の修道士が自分の胸元を開き、身体の内側にいる彼自身の魂に起こっていることを示すという仕方できわめて効果的に描かれている。幻視者ゾイゼの身体がヴィジョンの舞台となり、そこで彼自身の魂は神秘的な体験を受けるが、それはゾイゼの身体と切り離しては起こりえない。幻視者ゾイゼの身体と一体となるしもべの魂は、そのうえで永遠の知恵と抱擁し神秘的合一・一致 (unio mystica) を果たす。人間の身体と魂とがともにあわせて神と一体化する。それがまさに画面中央に大きく描写されているのである²⁴。

なお、ゾイゼが二重に登場するこの挿図2は、同じヴィジョンの図像でもヴィジョンのなかに修道士ゾイゼ描かれる図像 (挿図3, 6, 7, 8など) とは相違をなす (表のB (a) のなかでの違いに注意)。既述したように、ゾイゼがみたヴィジョンが視覚化される場合、幻視者と幻視の内容があわせて描かれているが (拙稿の分類では②のタイプになる)²⁵、そのなかで幻視者ゾイゼ (修道士の姿) としもべの魂というゾイゼの二重性の描写があることをかんがみると、ヴィジョンの図像学もさらに多層的にとらえることができるといえる。なお、この挿図2と、挿図3, 6, 7, 8との違いは、ゾイゼが薔薇の花の冠と両手両足に薔薇の聖痕のしるしをつけているか否かという描写の違いにもあらわれている。

加えて着目すべきは、自分の胸のうちのぞくゾイゼ、つまりヴィジョンを見るゾイゼが、この挿絵では見られる存在として描かれていることである。自らの胸を開き、そのなかで自分の魂と永遠の知恵とが抱擁する姿を開示する身ぶり、この挿絵を見る者を意識した姿勢となっている。ゾイゼの両側に立つ二人の天使も、手をあげてゾイゼのほうを指さしており、ゾイゼとその胸のな

²⁴ Ganz 2008, 318-319参照。

²⁵ 細田2012, 214-222。

かの二人を見るよう、観者に方向づけを与えている。したがってこの挿絵は、この点に関しても先の表のB (a) に属する他の挿図とは異なり (挿図6, 8については後述)、この挿絵そのものの受け手 (観者) を祈りに引き入れるような機能をもつと考えられる。挿図3, 6, 7などは、聖母子像や磔刑像の前のゾイゼがそれらの像をみて祈りを捧げてヴィジョンを受け取った場面だが、この挿図2は挿絵の前の観者に絵の意味内容——神秘的合一のヴィジョン——をより強く訴えかける。

さらにいうなら、ゾイゼ自身が祈りの対象物の像のように描かれているとも考えられる。よく指摘されるように、この図像は、聖アンナ三体 (Anna selbdritt) やシュラインの聖母子像 (Schreinmadonna/ vierge ouvrante) に類似し、いわゆる祈念像 (Andachtsbild) を想起させる²⁶。台座の上の彫像のように描かれているのも偶然ではないだろう²⁷。また、挿絵ページの枠組みもこの画面をとくに浮き上がらせている。この写本の挿絵ページは、一ページ全部を用いて描かれており、ページの四方が囲みの線で装飾されている。なかでもその枠組み——赤色の装飾模様が立体感を出している——がとくに強調されて、場面を一枚のアイコンのように見せる効果を与えているのは、この挿図2であろう。正面向きに座ったゾイゼの姿勢もその縁取りとともに、そこに祈りを捧げる祈念像としての機能を誘発する²⁸。

『自伝』の文章からは、愛する人に恋焦がれる直截的、感情的なトーンが読み取れるが、挿絵の黒いマントをはおり正面を向いたゾイゼの姿からは、神との神秘的な合一を受け手に教示し、模範を示す姿勢がうかがわれる。『自伝』においてはキリストのふるまいを模倣するゾイゼが、修道女をはじめとする受け手 (『自伝』の読者) の模範となるが、永遠の知恵とゾイゼの魂とが抱擁する描写は、親密で愛がこもっており、その二人の姿を見る者は、神との一致を具体的に想起することができる。

また挿絵ページに加えられたテキストによって、この画は単に『自伝』に基

²⁶ Colledge/ Marler 1984, 308-309; Hamburger 1998, 202-203; Lentjes 2004, 32. 祈念像については細田2011b, 319-346も参照。

²⁷ Hamburger 1998, 202.

²⁸ Lentjes 2004, 33-34参照。

づく画像を越えてゾイゼの思想を表現したものとなる。「永遠の知恵との愛のこもった抱擁により、すべての被造物、被造物性から自由である」という内容の文章は、マイスター・エックハルトの説をゾイゼが受け継いだことを示している²⁹。エックハルトの「離脱」(abegescheidenheit)に通じる。

エックハルトは、「何故なしに生きる」という説教(5b)³⁰において、人間は一にして単純でなくてはならないとし、さらにこの本性が露わであるということのなかに直接立脚しようとする者は、一切の個人的なことから脱却していなければならない、被造物たる性質をすべて無にして清き心でなくてはならない、「ない」(niht)ということから脱却していなければならない、と説く³¹。父なる神がその最内奥の根底において独り子を生むところが内的世界であり、魂のもっとも奥の場所、根底である。ここにおいて神の根底は私の根底であり、私の根底は神の根底である。「あらゆる仕方をなしに」(âne wise)神を求めることが神を神自身のままにとらえることであり、このような人こそ子とともに生きるものであり、生そのものである。生がそれ自身の根底から生きているということは、その根底で生がこんこんと湧き出る無限の豊かさをもつものである。そのようなところで「何故なしに」(âne warumbe)生きることが人間の本来的な生き方であるとされる。被造性を脱することは、一にして単純、清き心、根底につながるが、それは「何故なしに」、「あらゆる仕方なしに」生きる、働くことによって可能になるという。「何故なしに」働くべきことが説かれているが、それは、魂の内なる根源から働きそのもののために働かなければならないという主張である³²。

さらに「魂の三つの貧しさ」というマタイ福音書5:3に基づいた説教(52)³³では、離脱を霊における貧しさと結びつけている³⁴。

²⁹ Dinzelbacher 2002, 133.

³⁰ EW I, 66-75. エックハルト1990田島編訳35-42; エックハルト2006上田訳, 香田訳注25-30.

³¹ EW I, 66-69.

³² 松田2010, 72-77. 「エックハルトにとって精神の発展は「なぜなしに」において完成する。最高の徳とはそれゆえ、人が意志や目的や原因から完全に離脱したことによって獲得される」という指摘(香田2011, 163)も参照。

³³ EW I, 550-563. エックハルト1990田島編訳162-174; エックハルト2006上田訳, 香田訳注84-92.

³⁴ この説教については、岡部2002, 153-161も参照。

また「離脱について」³⁵という論述でも、純粋な離脱はあらゆる徳をしのぐと述べ、離脱の重要性を説いている。離脱とは、いっさいの被造物と自己自身から完全に解き放されていることである。完全なる離脱は、謙虚さなしにはありえない。「完全なる離脱の内に立つ人は、どんな消え去りゆくものもその人を動かすことができないほどに、またどんな肉体的なものも感ずることがないほどに、永遠の内へと移される」³⁶。「離脱は人を純粋性の内へと引き入れ、その純粋性からさらに単一性の内へと、その単一性から不変性の内へと引き入れ、神と人との間に等しさをつくり上げるのである。しかしこの等しさは恩寵の内では生起するものでなくてはならない」³⁷。このように、純粋な離脱は、ひとつの純粋な無に立つもので、最高の状態にあるものと説かれている。

エックハルトにおける「離脱」は、彼の神秘思想の中心概念の一つであるが、初期と後期の著作では意味内容に違いがあるという。我執から逃れるという意味での初期の離脱に対して、後期の著作では、魂を純粋無垢に清め、神の子の誕生を用意する働きという意味が強くなってくる³⁸。魂の完全な無化を要求する離脱が、このゾイゼの神秘的合一のヴィジョンにも影響を与えていると思われる。

『自伝』第6章に、ゾイゼのヴィジョンのなかにマイスター・エックハルトがあらわれたので、質問をすると、最高の合一に達するには、自己自身を脱し、すべてのことは神に発するもので、被造物によるものではないということを確認し、静かに耐え忍ぶことが有益な修練だという答えを得たと記されている(DS 23,1-12)。

ゾイゼは、エックハルトの離脱や放下(gelâzenheit)の説を受け継ぎつつ、さらにクレルヴォーのベルナルにさかのぼる花嫁神秘主義の傾向も取り入れ、永遠の知恵と魂との神秘的合一を表象化させる。いっさいの被造物性から

³⁵ DW V, 377-468; 539-547; EW II, 434-459. エックハルト1990田島編訳235-55; エックハルト1991川崎訳167-184. この論述の真正性については、エックハルト1990田島編訳289-290参照。

³⁶ DW V, 411, 541; EW II, 440-441. エックハルト1990田島編訳241; エックハルト1991川崎訳172参照。

³⁷ DW V, 412-413, 542; EW II, 442-443. エックハルト1990田島編訳242; エックハルト1991川崎訳173参照。

³⁸ 香田2011, 134-136, 153-160.

自由で離脱した、神の根底であり私の根底であるところで神秘的合一が完成するとされるが、そのようなイメージをこの挿図2はあらわしている。魂と神性との抱擁のこの表現は、ヴィジョンで経験された神秘的合一 (unio mystica) の、中世芸術におけるおそらくもっとも親密、内密な画像表現とされる³⁹。

さて次に、ゾイゼがみたヴィジョンの図像のなかでも相違があることを、永遠の知恵のモチーフとあわせて確認しよう。ヴィジョンのなかにあられた永遠の知恵に対して、ゾイゼは彼女とどのようにコンタクトをとっているだろうか。

挿図6をみると、ヴィジョン (『自伝』第41章, DS 139,18-140,15)⁴⁰でゾイゼに与えられた絵画のなかの聖母子像が、実際に生きている人物のようにゾイゼの前に立つ姿で描かれている。目の前に大きくあらわれた聖母子像に対して、ゾイゼはひざまずき両手をあげた姿勢で見上げているが、それは聖母子像に対する祈りのしぐさでもあろう。ゾイゼの背後には、彼を聖母子のほうに導く天使が立ち、頭上にはハーブを手にした天使が宙に浮かぶ。ゾイゼは、頭に薔薇の花冠をつけ、胸には IHC の文字、両手両足に聖痕を示す赤い薔薇の花 (赤の絵の具による小さな花びらのような円) がしるしづけられている。これはイエスの聖痕を象徴し、ゾイゼもイエスが十字架につけられた苦難を徹底的に模倣したことを示している⁴¹。

一方、聖母の胸のあたりに HERZTRUT (心の愛する人・恋人) という文字が書かれており、この聖母は永遠の知恵と同一視されている。子であるキリストを胸に抱き、女王のような堂々とした威厳をもってあらわれている。

また、挿図8にも永遠の知恵が描出されている。上の場面は、『自伝』第36章に記されたヴィジョンに基づく (DS 111,5-16)⁴²。ゾイゼが聖母マリア像に花環

³⁹ Dinzlbacher 2002, 133.

⁴⁰ ゾイゼ1991神谷訳165-167.

⁴¹ 薔薇の花冠と両手の薔薇の花は、アンナという霊の娘がまだ会ったことがないゾイゼを多くの修道士のなかから識別するために教えられた、ゾイゼの特徴であり、さらにゾイゼ自身が天使によって示された苦難のしるし——苦難は苦痛を与えるが、霊的にはその人を美しく飾る——でもある (『自伝』第22章, DS 64,1-65,3)。なお、ゾイゼの身体におけるしるし、聖痕については Ganz 2008, 319-322参照。

⁴² ゾイゼ1991神谷訳129.

をのせたら、天が開かれてヴィジョンがみえた。挿絵では、ゾイゼが天使によって抱擁され、もう一人の天使が本を持って立つが、これはおそらく『範典』の書物を示す⁴³。右上の天上を示す円——青地に金色の星がちりばめられている——のなかに男女の顔が見える。聖母マリアとキリストと考えられるが⁴⁴、このマリアを永遠の知恵をみなすことも可能であろう。音楽を奏でながら天に舞う二人の天使と梯子も、同じくヴィジョンに登場する。左端の椅子は、ゾイゼが僧房などで祈りや瞑想するとき用いていた椅子であろう⁴⁵。そこに座しているとよくヴィジョンがあらわれた。天と地 (僧房の椅子に象徴されるこの世) とを結ぶ梯子は、異次元世界を結ぶ常套手段である。

挿図8の下の場面は、『自伝』第44章の霊的騎士に関する記述による (DS 149,4-152,27)⁴⁶。霊的騎士に手柄として与えられる名誉や報酬とは、永遠の知恵から授けられる指輪だといわれている。下の場面でも上と同様に天上を示す青地と金色の星の半円部分から、永遠の知恵がゾイゼのほうに腕を伸ばし、指輪を与えようとしている。異界から永遠の知恵が地上のゾイゼに顕現したことが巧みに描かれている。赤い線で半円形の天上の世界を明確に区分しているが、そこから永遠の知恵は身をのりだし、地上でひざまずくゾイゼのほうへ腕をのばしている。異界から指輪がゾイゼに与えられ、現実の世界とヴィジョンの世界とが交錯していることが示されている。

3.2.3. ゾイゼ以外の人物がみたヴィジョン (挿図9)

最後に永遠の知恵に関して、ゾイゼ以外の人物によってみられたヴィジョンの図像を取り上げる。

この挿図9 (fol. 68v) の前ページ (fol. 68r) の下方にこの絵についての説明文が、

「次の絵は、神の満ちあふれる心がいかに他の多くの人びととも喜んで共有されるかを示す。」

⁴³ Diethelm 1988, 202.

⁴⁴ Colledge/ Marler 1984, 330; Diethelm 1988, 202.

⁴⁵ Diethelm 1988, 204.

⁴⁶ ゾイゼ1991神谷訳177-182.

(Diz naged bild zēigt, wie ein überuolles herz gotes das selb och gern gemeinsameti vil andren menschen.)

と記されている。

挿図ページの枠のなかに図像が描かれているが、一番大きく描かれている左側の人物の頭上に「永遠の知恵」(Die ewige wisheit) と記されている。その横に赤線で囲ったなかに

「私の名前イエスを熱望して身に着けようとする人びとを、私の神の庇護のもとへと受け入れよう。」

(In minen gētlichen schirm wil ich sú nemen, die minen namen Jesus in ir begird wen tragen.)

というテキストが書かれている。

この永遠の知恵は頭に王冠をかぶり手には王笏を持ち、マントを広げる。そのマントのなかで永遠の知恵のすぐ左隣に立つ人物、しもべ (Der diener) は、ページの装飾枠からもはみだし、頭上の永遠の知恵のほうへ顔を向けている。しもべゾイゼは、剃髪で修道服を着ている。頭には薔薇冠をかぶり、開いた胸元には IHC の文字が見える。さらに両手両足にも赤い薔薇のしるしが描かれている。しもべの前には、大きな椅子の前にひざまずく女性 (Elisabet) がいる。彼女は黒いヴェールをかぶり修道服を身に着けており、ゾイゼの霊的娘エルスベト・シュターゲルだろう。彼女はゾイゼから花飾りのついた花冠に囲まれた聖なる名 (IHC = IHS の文字) を受け取ろうとしている⁴⁷。エルスベトの頭上、永遠の知恵のマントの背後からは天使が出現し、両手を差し出しながら彼女に冠を授ける。エルスベトの右側には修道女と修道士が立つ。さらに彼女の下には、修道女や他の人びとが、宙に浮かんでいるように書かれた IHC の文字を手をしようと手を伸ばしながら集まっている。

永遠の知恵がマントをひろげ、そのなかに人びとが集まっている描写は、図像学的にみると聖母マリアの図像のなかの庇護のマントの図像⁴⁸に基づくこと

⁴⁷ Diethelm 1988, 209によると、ゾイゼとエルスベトとがともに花冠のなかの IHC の文字を支えている。

⁴⁸ Kirschbaum, u.a. (eds.), *Lexikon der christlichen Ikonographie* 4 (1972), 128-133, Schutzmantelschaft.

は明らかである。ゾイゼ、エルスベトをはじめ、すべての人びとが永遠の知恵の庇護のもとにあることが示されている。

この挿図の直接の出典となるテキストをあげることはできないが、もっとも近いのは『自伝』第37章に記されたある女性のヴィジョン、および第45章の信仰深い女性についてのエピソードである⁴⁹。『自伝』第37章によると、生まれの高貴なある女性が自分の犯した背徳に後悔の気持ちを抱いたとき、聖母があらわれ、彼女の司祭のところへ行きなさい、彼が救い出すから、と言われたという。その女性はその司祭に会ったことはないが、慈悲の母が言うには、自分のマントの下に彼をくるんで保護している。彼は苦しんでいる人びととすべてのための救い手であり慰め手であるので、その女性のことも慰めるはずだという。そこで女性はその人物のもとへ行って救われた (DS 117,9-21)。

『自伝』第45章にも、聖母が信仰深いある女性にあらわれたというエピソードがある。聖母は彼女に、ゾイゼがイエスの名前を熱心に広めたこと、そのため、彼が亡くなった後は永遠の報酬を受けるということを語る。この女性は、信仰心厚い娘ともいわれエルスベト・シュターゲルと考えられるが、ゾイゼが胸の上に刻んだ名前に対して熱い帰依の思いを持っていることに気づき、彼女自身もこの名前に対して特別な思いを抱くようになる。そこで、IHS の文字を赤い絹糸で小さな布に縫い付けた。他の多くの信仰者のためにも、エルスベトは同様に文字を縫い付けた布を作る。その布を、しもべが自分の胸に直接置いて神の祝福を与え、信仰者に渡すように手はずをととのえた (DS 153,9-155,10)。

このような記述をもとに、この挿図ではゾイゼを庇護のマントでくるむ聖母というヴィジョンと、イエスの名前の崇敬——イエスへの追従、イエスへの信仰——が組み合わされている。挿図9の永遠の知恵は、上記のエピソードと関連させるなら、聖母マリアとみなせるだろう。『自伝』第37章のヴィジョンで聖母が語るように、マントの庇護のなかにしもべゾイゼがいるからである。

この挿図9で注目すべきは、ゾイゼの霊の娘、テス (スイス) のドミニコ女子修道院に属していたエルスベト・シュターゲルの描写である⁵⁰。彼女は IHS

⁴⁹ Diethelm 1988, 210-211.

⁵⁰ Colledge/ Marler 1984, 337-338は、この挿図9で Elisabet と記されている修道女をハンガリー

の文字を小さな布に赤糸で刺繍をし、さらに他の多くの信仰者のためにも同様に刺繍した布地をつくり、イエスの名への信仰をひろめることに貢献した。エルスベトはゾイゼを師と仰ぎ、ゾイゼの教えや彼の内面生活を密かに記録し、またゾイゼから送られた手紙などを保管していた。それらはゾイゼの命令によって処分されてはしまったが、残された手紙や彼女の手記は、ゾイゼがのちに『自伝』をまとめるのに役立った。彼女の存在なしには『範典』はできあがらなかったといわれており、この挿絵で、天使から王冠が授けられている描写も、彼女の存在が高められていることを示す。椅子の上で彼女がひざまずいているわきに一冊の本があることも看過できない。彼女が『範典』の編集に大きく協力したことが示唆される。この挿絵のもととなるテキストでは、エルスベトに対し聖母があらわれたとあるので、聖母マリアをみる幻視者エルスベトという関係だが、画像としては、聖母によって語られたこととして、彼女自身がゾイゼとともに永遠の知恵の庇護のもとにあることが示され、ゾイゼとの結びつきが強調される。

広げられたマントのなかには、ゾイゼやエルスベト・シュターゲルをはじめとして、修道士、修道女、そして信徒たちが集まっている。ゾイゼからエルスベトへ花冠に囲まれた IHC (=IHS) のモノグラムが差し出され、エルスベトのもとでは IHC のモノグラムを得ようと群がっている人びとが巧みに描かれている。ゾイゼは自らの胸に鉄筆で IHS の文字を刻み、それを知ったエルスベトが、同様に IHS の文字を刺繍したことが、このように視覚化されているのである。エルスベトからモノグラムを受け取っていることで、イエスの名があまねく広まることが示されている。さらに、エルスベトのもとで IHC の文字を手にしようとしている人びとは、イエスの名を崇敬し、イエスという名を唱え天の主に対して祈りを捧げているともみなすことができるだろう。

この挿絵のキャプション「私の名前イエスを熱望して身に着けようとする人

のエリサベトの甥の娘、つまりハンガリー王国の国王アンドラーシュ3世（エンドレ3世、在位1290-1301年、Andreas der Dritten von Ungarn）の娘（テスのドミニコ会修道女）とみなし、彼女をゾイゼの霊の娘として、彼女からゾイゼに花冠が手渡される場面と解釈しているが、根拠がはっきりしない。それよりもこの修道女はやはりエルスベト・シュターゲルととらえ、彼女によってもイエスの名がひろがったことが示されているととらえたほうが適切だと思われる（Diethelm 1988, 210-211も同様の意見）。

びとを、私の神の庇護のもとへと受け入れよう」とあわせてみると、イエスの名を祈り求め、イエスを信仰する者は、神でもあり聖母でもある永遠の知恵のもとで守られるということがよく理解される。

ところで、挿図9の前ページの下には、もとの原本にあった挿図の説明文のあとに続いて、「パーテル・ノステル（われらの父よ＝主の祈り）とアヴェ・マリアを唱えよ」（sprech eyn pater noster und ein aue maria）という文章がのち書き加えられていることにも留意すべきである⁵¹。さらに一番下の行には、IESUSとMARIAという文字が大きく書かれている。つまり、この挿図9と関連させて、天の父なる神よという主に対する祈りと、聖母マリアに対する祈りを唱えよ、と命じられているのである。テキストのなかに画像が挿入されることにより、写本全体が読者に祈りを呼び起こす機能、あるいは祈りをするように誘導する機能を持つようになったといえる。ここには、イエスの名、IHSの文字に対する信仰、崇拜が前面に出ている⁵²。

また、イエスという名前を唱えるだけで、そこに祈りが込められるという指摘もここで想起される⁵³。イエスという聖なる名前はそれだけで特別な力を有し、それを唱えるだけで聖なる空間を顕現させる。さらに文字の力、言葉を唱えるという力が認識され、テキストと挿絵によって祈りの意味や機能について省察するよう、受け手へ訴えかけている。

本稿では、ゾイゼの著作における永遠の知恵の意味を明らかにしたうえで、その図像をみてきたが、図像モチーフの特徴として、王冠、王笏、女王や貴婦人のような衣服、ニプスなどで威厳や聖性を表出していることが明らかとなった。青い天と金色の星、あるいは全宇宙を示す球体なども、永遠の知恵がこの世を超越した全世界の支配者であることを象徴する⁵⁴。彼女は若い乙女であったり、貴婦人、女王、聖母としてあらわれたり、さらには若者、父なる神、

⁵¹ Lentes 2004, 32.

⁵² Lentes 2004, 32.

⁵³ 棚次1998, 285-290ほか、細田2013も参照。

⁵⁴ Diethelm 1988, 202なども参照。

キリストともよばれ、図像でも聖母マリアとみなせたり、あるいは性を超越した存在者にとらえられる。

そして永遠の知恵とのコンタクトは、ヴィジョンのなかで、または異次元世界が交錯することをおしてなされている。祈りによって聖なる時空が顕現することが、人物の身ぶりやまなざしなどからも見て取れるのであり、ヴィジョンの内容そのものがヒエロファニーの画像だとみなしうる。

『範典』の写本に入っている挿絵は、天上の絵・天国の絵 (dú himelschen bilde) であるとゾイゼ自身がプロローグで述べている。天上を示す挿絵は、人間を引きずり落とす、誘惑の多いまやかしのこの現実の世界から、愛する神へと引き上げるために役立つというのである (DS 4, 24-28)⁵⁵。ここから、信仰を持った人が天上の愛すべき神へと視線を向けるよう、絵によっても示し誘導するという『範典』写本の意図がうかがえる。地上の現実世界と天上の世界とが対比されており、後者をより具体的に教示するために挿絵が描かれ、写本のなかに配置されたのである。永遠の知恵との対話や神秘的合一は、聖なる時空の顕現においてなされることが、画像からも明確となっている。また、挿絵の挿入に関してもはじめからゾイゼの構想が反映されていると考えられ⁵⁶、さらに挿絵に対するキャプションなどあとから加えられた文章も重要な役割を果たし、写本では、テキスト本文と挿絵とが相互に機能しあっていることも確認される。

⁵⁵ ゾイゼ1991神谷訳5。

⁵⁶ Diethelm 1988, 166; Exh. Cat., *Krone und Schleier*, 478, Lentes 2004, 15ほか。

参考文献

原典

- Meister Eckhart: *Meister Eckhart. Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff. Deutsche Werke (= DW).
- Meister Eckhart: *Meister Eckhart. Werke*, hrsg. von N. Largier, Frankfurt am Main 1993 (= EW).
- Seuse, Heinrich: *Heinrich Seuse, Deutsche Schriften*. Im Auftrag der Württembergischen Kommission für Landesgeschichte hrsg. von K. Bihlmeyer, Stuttgart 1907 (Nachdr. Frankfurt am Main 1961). (→ Bihlmeyer, K. 1907)
- Seuse, Heinrich: *Heinrich Seuse. Stundenbuch der Weisheit. Das „Horologium Sapientiae“*, übersetzt von S. Fenten, Würzburg 2007. (→ Fenten, S. 2007)

研究文献, 邦訳

- Altrock, S./ Ziegeler, H.-J. 2001: Vom diener der ewigen wisheit zum Autor Heinrich Seuse. Autorschaft und Medienwandel in den illustrierten Handschriften und Drucken von Heinrich Seuses „Exemplar“, in: Peters, U. (ed.), *Text und Kultur. Mittelalterliche Literatur 1150-1450. DFG-Symposium 2000*, Stuttgart/ Weimar 2001, 150-181.
- Bihlmeyer, K. 1907: *Heinrich Seuse, Deutsche Schriften*, Stuttgart (= DS) .
- Colledge, E./ Marler, J.C. 1984: “Mystical” Pictures in the Suso “Exemplar” MS Strasbourg 2929, in: *Archivum Fratrum Praedicatorum* 54, 293-354.
- Diethelm, A. M. 1988: *Durch sin selbs unerstorben vichlichkeit hin zuo grosser loblichen heilikeit Körperlichkeit in der Vita Heinrich Seuses*, Bern u.a.
- Dinzelbacher, P. 2002: *Himmel, Hölle, Heilige. Visionen und Kunst im Mittelalter*, Darmstadt.
- Exh. Cat., *Krone und Schleier. Kunst aus mittelalterlichen Frauenklöstern*, München 2005.
- Fenten, S. 2007: *Heinrich Seuse. Stundenbuch der Weisheit. Das „Horologium Sapientiae“*, Würzburg.
- Ganz, D. 2008: *Medien der Offenbarung. Visionsdarstellungen im Mittelalter*, Berlin.
- Hamburger, J.F. 1998: *The Visual and the Visionary. Art and Female Spirituality in Late Medieval Germany*, New York.
- Kirschbaum, E. u.a. (eds.) 1968-1976: *Lexikon der christlichen Ikonographie* 1-8, Rom/

Freiburg, u.a.

Lentes, T. 2004: Der mediale Status des Bildes. Bildlichkeit bei Heinrich Seuse – statt einer Einleitung, in: Ganz, D./ Lentes, T. (eds.), *Ästhetik des Unsichtbaren. Bildtheorie und Bildgebrauch in der Vormoderne*, Berlin.

Lexer, M. 1876-1878, *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch I-III*, Leipzig.

エックハルト1990『エックハルト説教集』田島照久編訳, 岩波文庫。

—— 1991『エックハルト論述集』川崎幸夫訳(ドイツ神秘主義叢書3), 創文社。

—— 2006『ドイツ語説教集』上田閑照訳, 香田芳樹訳注(ドイツ神秘主義叢書2), 創文社。

岡部雄三2002「表現者としての神と人間——エックハルトの神秘思想」宮本久雄・岡部雄三編『語りえぬもの』からの問いかけ』講談社, 149-165。

香田芳樹2011『マイスター・エックハルト——生涯と著作』創文社。

ゾイゼ, ハインリヒ1991『ゾイゼの生涯』神谷完訳(ドイツ神秘主義叢書5) 創文社。

—— 1995『プロローグ』『ゾイゼの自伝』(抄訳)『永遠の知恵の小冊子』(抄訳)『真理の小冊子』『書簡抄』植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集9ゾイゼとリュースブルク』教文館。

—— 1998『永遠の知恵の書/真理の書/小書簡集』神谷完訳(ドイツ神秘主義叢書6) 創文社。

—— 2001『永遠の知恵の書』(抄訳)橋本裕明訳『中世思想原典集成16ドイツ神秘思想』平凡社, 529-572。

棚次正和1998『宗教の根源——祈りの人間論序説』世界思想社。

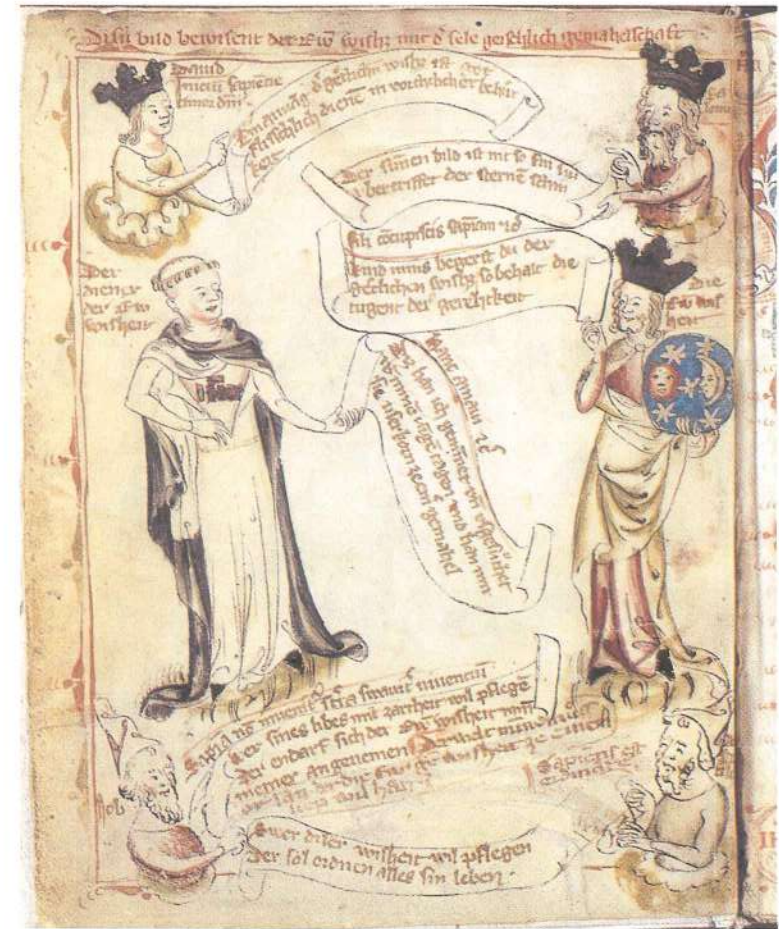
細田あや子2011a「光り輝く者との交感——ヒルデガルト・フォン・ビンゲンのヴィジョン」栗原隆編『共感と感応——人間学の新たな地平』東北大学出版会, 257-288。

—— 2011b「宗教における表象と造形——その教育的機能をめぐって」『宗教研究』No.369, 319-346。

—— 2012「中世における幻視と夢」竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世III 神秘哲学』岩波書店, 211-244。

—— 2013「祈りの言葉とイメージの力」栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版(印刷中)。

松田美佳2010『マイスター・エックハルトの生の教説』行路社。



挿図1 『範典』写本(ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 1v)



挿図2 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 8v）



挿図3 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 22r）



挿図4 『範典』写本 (ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 28v)



挿図5 『範典』写本 (ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 57r)



挿図6 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 62r）



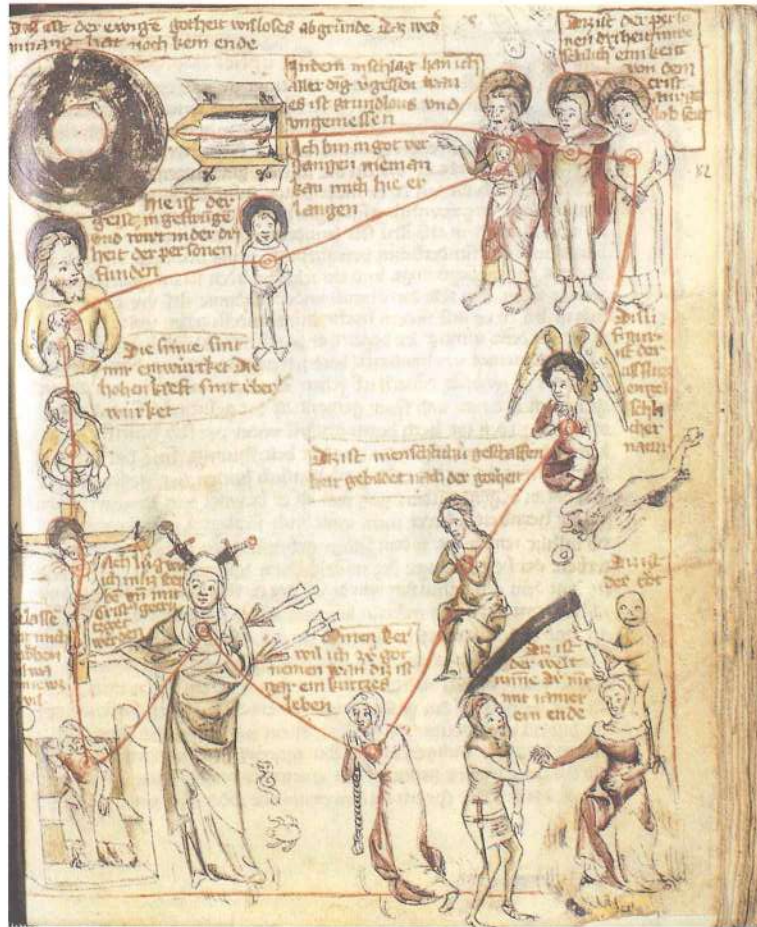
挿図7 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 65v）



挿図8 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 67r）



挿図9 『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 68v）



挿図10 『範典』写本 (ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 82r)



挿図11 『範典』写本 (ストラスブール国立大学図書館Ms. 2929, fol. 109v)